

第百五十七話 マッカーサー参謀と呼ばれた男

情報見積は、敵に関する情報資料を完璧に収集し得ても難しいものであり、更には極めて限られた情報資料のみで判断するとなると、正に至難の業である。限られた情報資料を蓄積し、それらを丹念に読み解くことにとり、敵の企図が判明することがある。

『マッカーサーの参謀』と呼ばれた堀栄三少佐（終戦時中佐）の業績は多くの示唆に富んでいる。

1 堀栄三少佐略歴

1913年（大正2年）10月16日生 奈良県出身 士46期、陸大56期

大本営陸軍部参謀、第二部（情報部）勤務、独課、ソ課及び英米課

14方面軍（山下大将）司令部情報参謀、終戦後陸上自衛隊入隊、駐独防衛駐在官、統幕二室長等歴任、退官後は、大学講師、西吉野村村長（在職中に逝去）を務めた。

戦中の山下奉文陸軍大将、そして戦後海外の戦史研究家にもその能力を高く評価されている。

2 台湾沖航空戦の戦果に疑義を呈するなど冷静な判断を下し、また、「敵軍戦法早わかり」を作成して第一線部隊に配布した。



3 米軍のルソン島上陸時期・場所の判断

方面軍の戦略持久への態勢変換の判断に資するため、米軍のルソン上陸の時期・場所の解明が喫緊の課題であった。米軍の過去の進攻パターン、収集したゲリラ情報、米軍機の航跡や度数の判断、域内の抗日運動の状況等、米軍にとっての比島解放の政治的必要性等、米軍の編成装備等、彼我の戦力分析等々を考量して、山下大将に「一月下旬、リングエン湾に上陸、当初5～6個師団等」と報告した。二週間でいった。

戦後、米軍から何故正確な見積もりが出来たのか、米軍暗号や重要書類の盗読ではないかと疑われたという。

4 米軍の本土上陸作戦に関する情勢判断

堀少佐が属する米国班では、米軍の本土上陸地点・時期・兵力判断が焦眉の急となっていた。米軍の兵力、日本南部の気象条件、ソ連の参戦に伴う米軍の早期日本占領の要、等々から判断し、九州上陸地点は志布志湾と判断した。関東上陸も同じ。

5 原爆投下機のコールサインの割り出し

米軍が発する電波に含まれるコールサインを蓄積分析して戦略爆撃部隊の作戦を判断しようとする地味な根気のいる作業を続けた結果、何処に〇〇戦隊が居ると判断した。

その中で、特異行動をするコールサイン部隊（V600番台）が存在することを覚知した。電波傍受と監視を継続し、特殊任務機と呼んだという。8月6日、この機が、「我等目標に進行中」と打電した。0815広島に原爆が投下された。

以上をもって、大本営は原爆投下を知っていたのではないかと、活かされなかった情報等との指摘が某TVやマスコミで為されたが、それは戦後の朝知恵、結果論だ。

6 陸軍特殊情報部（特情部）

大正10年に外務省電信課分室に、陸軍、海軍、外務省、逓信省の四省連合の暗号研究会が発足し、それが変遷を経て陸軍中央特種情報部となり、終戦時には田無から高井戸の浴風園という養老院の建物に移っていた。米軍の暗号解読は出来なかったが、通信情報を収集蓄積して色々有益な情報を得ていた。（5項関連）収集された情報は全て焼却された。残念だ・・・、

7 情報の基本は、地味で些細な情報資料の蓄積と冷静な分析である。日本は作戦・運用が優先され、情報は軽視される傾向にあるが、如何なものだろうか？少なくとも、G2とG3は徹底的に議論すべきである。その過程で見えぬものが見えてくる。

* 情報に関心を持ち、情報センスを磨く必要があろう。（第百五十七話 了）